

日本の絵画とデザイン



表現に於ける手段は
ボーダレス

三重大学教育学部・准教授

岡田 博明 Okada, Hiroaki

[URL] <http://web.mac.com/halhal1962/Site/Welcome.html>

◎「私の仕事は、日本画とデザインです。」

と言うとほとんどの方は、不思議な顔をします。同じ美術でもかけ離れているように思えるからでしょうか。しかし、私は日本画もデザインも表現の手法の一つであり、技術的な違いこそありますが、制作に対する考え方は同じであるべきだと考えています。

◎世阿弥の言葉「離見の見」

「舞を舞う者は、自分の前方を見る事はできる。これを『我見』と言います。しかし『我見』では、自分の後ろ姿までは見る事はできません。そこで、観客が舞を見ている視点である『離見』と『我見』との2つの視点から見る姿を、自分の全体の姿として捉えた上で舞を舞え。」という世阿弥^{*1}の教えがあります。私は、あらゆる表現にこの教えが当てはまると考えています。

◎表現手法「離見の見」

デザインでは、こんな物を創りたい=『我見』。しかし、使う人にとって機能性はどうか=『離見』。

絵画では、このモチーフをこう表現したい=『我見』。しかし、それは見る者にも同じように感じられるか=『離見』。と言うように、どのような表現手法でも、この『2つの見』を統合した『離見の見』を当てはめ、目的に応じてデザインと言う手法や絵画と言う手法で表現を行えばいいのです。

作品を創る制作過程においても『離見の見』が生きてきます。作品を創るとは、一つひとつの行為^{*2}の積み重ねです。そして、その一つひとつの行為を評価しなければなりません。今、決めた線は、色は、これで良いかを一つひとつ確認した上で、次の行為に進みます。この時の評価が『離見』であり、また評価するための基準が『我見』です。『我見』が、曖昧なままに制作を続ければ、作品は、完成を見ることがないでしょう。

◎創造の源

ある心理学の先生が、「人は表現する事が出来なくなると、心が死んでしまう。」と言っています。その手段が、絵画やデザインもしくは、音楽や言葉や文字であっても、我々は、誰かに自分の思いを表現したいと思っています。一つの手法にこだわる事は重要な事です、しかし、自分で自分に制約を設けてしまう事は、ありません。そこに『離見の見』が生かされていれば、表現における手段は、ボーダレスであるべきなのです。こだわりと自由な表現による発想の飛躍こそが創造の源と考えます。

*1 世阿弥=室町時代初期の猿楽師。父の観阿弥(観阿彌陀佛)とともに猿楽(申楽とも。現在の能)を大成し、多くの書を残す。観阿弥、世阿弥の能は観世流として現代に受け継がれている。

*2 描く、切る、付ける、削る、こする等々のあらゆる人為的作業の痕跡。



2007年の作品から「薄墨桜」1940×1303



三重県災害情報収集車

2006年の作品から「午睡」F10

2008年の作品から「さくら」120×120

「静寂の刻」1940×1303

デザイン研究室では、デザインの有用性をもっと理解してもらうために学生と協働でバーチャルデザインオフィス「カゲムシャ」を運営しています。グラフィックデザイン中心で主に大学内の仕事を請け負っています。学生のデザインですが、興味の有る方はホームページをご覧ください。

[Web address]

http://homepage.mac.com/kagemu_sya/web/index.html